長洲町立長洲小学校　校長便り　№２１

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和４年７月１日(金)

【雑感】不平を言う前に自分から動く

先日、ある本を読んでいまして共感することがあったので、紹介します。

「暗いと不平を言うよりも、進んで灯りをつけましょう。」

心のともしび運動が掲げるモットーだそうです。この言葉、その通りと思うのは私だけでしょうか。最近は便利な世の中になりすぎて、すぐ「暗い」、あるいは設定を変えて「寒い」「暑い」…と思い通りにならないことを、不平不満としてついつい口にしてしまっています。でも、よく考えてみればそれは他力本願で、幸せなことを他人の力に頼っていることと同じですね。自分で動いて初めて幸せを手に入れることができるのに、それを忘れているのです。この本を読みながら、自分を戒める時間となりました。

さて、この考えを大人に当てはめてみましょう。子ども達が言うことを聞かない、だから大声で言い聞かせようとする、それでも言うことを聞かないものだから、とうとう怒鳴り声になってしまう…。このやり方は効果が上がらないばかりか、非常にエネルギーを浪費し疲れのもとになってしまいます。これでは達成感もなく、モチベーションも上がりません。子どもに原因を求めることは簡単にできます。でもその前に、我々自身が動くことが必要な気がしています。子ども達に「こうしなさい！」「何でできないの！」は教育的ではありません。「大人が後ろ姿で模範を示す」というようなビジョンが必要だと思います。

では、どうすればこのような状況から抜け出すことができるのか？　私がここで人生哲学みたいなもの？を語っても釈迦に説法ですので、私が心掛けている簡単にできることを一つ紹介します。「子どもの前では、原則、笑顔です。」そうすることで、子ども達の笑顔を引き出すことができ、叱らなければいけない時にも効果が倍増します。大人は、普段から子ども達の顔を観察しなければなりませんね。そして子ども達は大人を見ているということを自覚し、眉間のしわに気が付いたら、そのまま鏡を見ながら笑顔を作りましょう。（ここだけの話、眉間のしわは、セロテープで伸ばせます。私、実際に試してみましたから…。）

不平不満について最近思うことをつらつらと書いてみます。大人の社会にも不平不満は溢れていますね。その不平不満を大声で口にするとどうなるでしょう？　私の経験では、場の雰囲気を壊し、不平不満を口にした者は周囲から孤立してしまいます。誰でも不平不満を持っており、また、組織には課題があります。それをどうすれば解決できるのかを、まず個人レベルで考え、改善策を仲間に相談し、新たなアイデアを取り入れて組織として改善策を実行することが改革に繋がると考えます。他力本願では課題解決はおろか、問題が放置されそれが大きくなり、個人では解決不可能な状態に対して莫大なエネルギーと時間を費やすことになります。課題解決の主体者意識は言動にも良い影響をもたらします。不平不満など口にせず、同僚性を発揮し組織として課題解決にあたるようになります。これこそが組織のあるべき姿と思います。私も愚痴りたくなることはありますが、それは教頭先生に愚痴ることにしましょう。

シリーズ「自分を語る」＃２１

中２から中３へ、クラス替えもなく、落ち着いた４月を過ごしましたが、さすがに中３ともなると、仲間の雰囲気が少し違っていました。いよいよ高校進学が見え隠れするようになったからです。それでも、仲の良かった仲間と一緒におバカなことばかりやっていました。２学期の文化祭での事、私達のクラスは「白雪姫」の劇をすることになり、私はなぜか「魔法使いのお婆さん」をやることになってしまいました。今でもこの写真が残っていて、我が子が見てゲラゲラ笑っています。丁度この頃だったと思います。２学期のある日、仲間と一緒にのんびりと帰っている途中、私が自分の志望校について弱気な発言をしたところ、強い口調で「俺と一緒にあそこに行くんだろ？簡単に諦めるなぁ！」その一言で、私も気合が入りました。この友だちは現在、名古屋大学でスポーツ心理学の教授をやっています。お互い「お前が教授か？　日本が危うい。」「お前が校長？　俺の娘は通わせん。」なんて、言い合っています。こんな仲間がいたから、今の私があるように思います。こうして考えると、中学時代の後半は、永く付き合える仲間を探していた様な気がします。色々な事を冷静に、客観的に判断できるようになってきた時期だったのでしょう。当時の生活を振り返ると、楽しかったけど、大切なことは忘れなかったと言えるような気がします。私の両親はこう言います。「あの頃のおったちは、ちゃ～んと、友達は選べ、て言いよったけんなぁ。」中学時代、親が言うことはうるさかったけど、心のどこかで聞いていたのでしょう。親の影響力は凄いです。

高校受験の頃、私澤田は私立の受験が終わってすぐに風疹に罹ってしまいました。その後、公立高校受験まで殆ど勉強もできず（というよりせず？）、公立高校の試験当日を迎えました。案の定結果はさんさんなもので、発表の日は私立高校への校納金を持参して見に行きました。それでも何とか結果オーライで、その安心が元で高校時代はあまり勉強をしませんでした。それが影響し？第一志望大学への進学を諦めざるを得ませんでした。というより、その頃の私は楽をしようとしたのでしょう、難しいことから逃げたのです。困難を避けたのです。実は、それが私のコンプレックスとなって、ずっと、今でも「あの時こうしていれば…」と思い出すことがあります。怪我の功名といいますか、そのコンプレックスは、今の自分を支えているようです。「自分はあの時勉強しなかった。だから、人より多く勉強しなければならない。専門性をもった先生方より倍、いやそれ以上の努力をしないと、この世界ではやっていけない。」と思うようになりました。たまたま、研究指定を受けている学校でお世話になる時間が長く、その中で鍛えられました。今でも授業は下手ですが、子ども達や保護者の願いをスクリーニングして、どのような教育を提供していくのか、しっかり考えています。そして、教職が生業となっている今、貴重な税金から給料を頂くということはどういう意味があるのか、そして費用対効果はどうなのか、しっかり考えるようにしています。費用対効果はっきりとは見えませんが、子ども達の将来の姿や先生方の頑張りで判断できるでしょう。子どもとしっかり向き合う姿勢を忘れない様にしたいと思う澤田の独り言でした。

（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）